

身の丈のまちづくりを目指して

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業
 『集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』

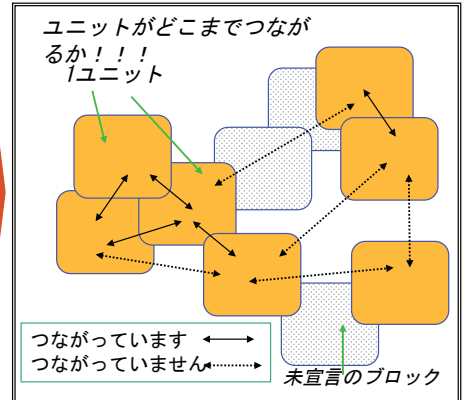
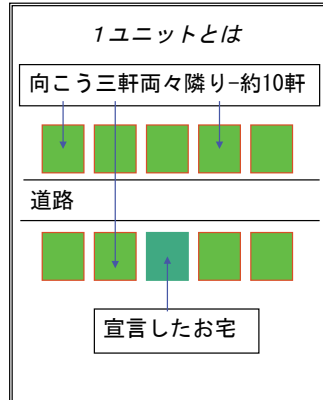


図1. 「向こう三軒両々隣り安心安全数珠つなぎ」左：取組み写真¹⁾ / 右：概念図

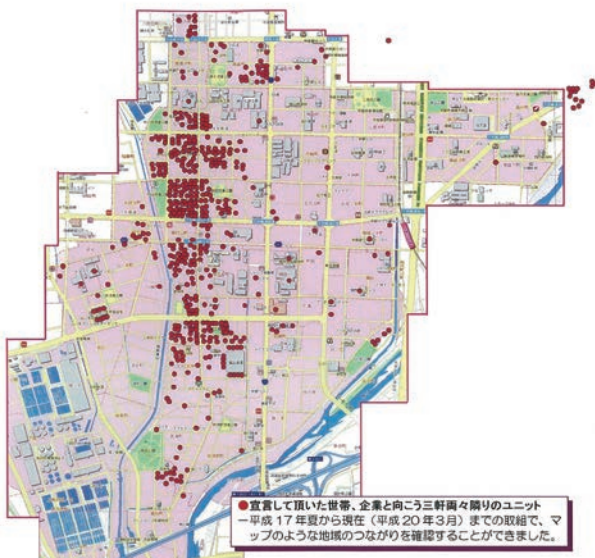


図2. 向こう三軒両々隣り安心安全数珠つなぎマップ (南区上鳥羽地区)



図3. せいつつ住まい交流会の取組記事 (上京区成逸学区)²⁾

はじめに

石本氏は、学生時代から歴史的な町並み保存運動に参加し、都市計画コンサルタント事務所で、主に市街地整備や住宅整備などの業務で様々なまちづくりの場面に参加し、現在はまちづくりプランナーとして活動している。1999年度からは大学での都市政策分野の講義を行い、2002年度からまちづくり実践講座のゼミを担当。京都市内を中心に市民の自主的なまちづくり活動のアドバイザーとして活動展開中である。最近ではこれまでのまちづくり現場での実践経験を踏まえ、まちづくりの多様な現場で互いに違いを認め合いながらも緩やかに暮らす「価値共有型のまちづくり」を進めるため、みんながまちの将来像を共有し、「みんながこちよいと思えるまち」を目指すまちづくりの流れづくりの支援活動に取り組んでいる。

まちづくりへの取組姿勢について、石本氏は平成13年1月に行われた宮本憲一氏の講演「都市核

と都心界隈の維持可能な発展」—都市核とは「住み心地の良いまち」—を聴講し感銘を受け、「美しい都市づくりとは住み心地のよい都市づくり」であると実感した。また、延藤安弘氏の講演で、「土の人」と「風の人」の交わり合いが地域の文化を豊かにするとの話に接し、「どうしたら、土の人と交わりあい、こちよい風をふかすことができるか」をまちづくりプランナーの基本姿勢として、多くのまちづくり現場で支援活動を展開している。

先達からのアドバイス、まちづくりの実践活動を通して、石本氏はまちづくりプランナーとして、まちとの語り合いの中で分相応のまちへの思いを共有することが「身の丈のまちづくりである」ことを信条に活動している。

本稿では、石本氏のこれまでの活動事例や自身のまちづくりに取り組む姿勢の紹介とともに、以前、関わったことのある男山地域のまちづくりへの提案について考えをいただいた。

1. 団地再生に向けた支援事例の紹介

「ここちよいまちづくり」に向けた団地再生について、3地域でのアドバイス事例を紹介する。

1-1. 洛西ニュータウン

京都市西京区に位置する洛西ニュータウンは人口が一時3万5千人を越える地域であったが、今では人口減少が続いており、将来は2万人を切るといわれている。ニュータウン再生が進められつつある時代、洛西ニュータウンもその時期を迎えていると感じていた。

再生を考えるきっかけとなったのは、ニュータウン内にある京都府医師会館跡地に建設されたマンションであった(図4)。用途地域は住居専用地であったが、高さ制限が20m以下のため、周辺は低層の戸建て住宅が建ち並ぶ中、7階建てのマンションが建設されることが決定した。この計画に対して周辺住民から反対の声があがり、ニュータウン全体の都市計画について見直しが必要だという要望が出た。このような経緯もあって京都市も動きだし、再生計画への取組を開始した。

まず、洛西ニュータウンまちづくり検討会を立ち上げ、まちづくりビジョンづくりを平成17年8月から18年11月まで行った。平成19年6月からは、洛西ニュータウン創生推進委員会においてビジョンの実現にむけて取り組んでいる。

同時に、検討会では住民の意見を聞くための洛西ニュータウン・タウンミーティングと題した住民向けのWSを4回行った(図5)。1回目は「洛西まち探検」。実際に住民と一緒にまち歩きを行い、まちの良いところを探した。2回目は「洛西まち語り」。前回のまち歩きで見つけた良いところをお互いに伝え合い共有した。3回目は「新・洛西まち物語」。自分達でまちの将来を考え、「若い世代がまちに帰ってきた!!」、「三世代が交流できるまち」というタ

イトルの物語をつくった。最終の4回目は「洛西まちづくりビジョンを考える」。このWSを通してまちの将来像を皆で共有した。このWSで獲得した方向はこれから実践していくまちづくりの軸となり、今後まちづくりを進めるうえで方向性がずれた時に立ち戻ることのできる原点となった。

現在も洛西ニュータウンにおけるまちづくりは洛西ニュータウン創生推進委員会を中心に展開している。

1-2. 香陵学区のまちづくり

香陵地区は福岡市東区にある世帯数1万戸、人口3万人のシーサイドタウンとして昭和51年に竣工し、54年から住宅建設が始まった地域である。平成2年には磯崎新アトリエが監修したネクサスワールドが完成し、良好な空間が形成されていた。香陵校区は平成4年に分離して誕生した新しい校区であり、共同住宅に住む人のみで構成されたまちである(図6)。

まちづくりに至ったきっかけの背

景は少し違うが、洛西ニュータウンと同様、大規模マンション建設がきっかけであった。地区内の予備校の寮跡に、分譲の大規模マンションが建設された。地域全体が共同住宅で構成されているこのまちでは、外部空間の計画を各街区ごとに委ねているのが現状であった。その中でこのマンションは街区外の優れた住環境が前提の計画で、マンション自体の外部空間と周辺環境との調和に欠けていることから、住民の中で外部空間の悪化への不安が起り、まちづくりルールづくりを考えることになった。このような香陵地区のまちづくりの取組への提案として、

1. 新規住宅供給による活性化
2. 多様な住居者層の価値観の共有
3. プライベートからパブリックまでの領域に応じたまち管理

以上の3点を提示した。共同のまちであるために、みんなでパブリック空間を守ることが前提のまちである。現在の香陵地区の状況を十分に踏まえつつ、これからのまちづ



図4. 建設されたマンション³⁾



図5. 洛西ミーティング(住民向けWS)⁴⁾



図6. 香陵学区の様子⁵⁾



図7. 香陵学区「安全・安心点検マップ」⁶⁾

くりの方向性を示す。洛西ニュータウンと同様に、まちのいいこと、いいところをみんなで共有し、地域で作成している「安全・安心・点検マップ」(図7)をもとに、「香陵まち物語」をつくる。そして、「まちづくりビジョン」を共有して、まちの将来像をみんなで守るためのまちづくりのルールをつくり、住人、事業者に関係なく、わかりやすくルールを伝える。伝えることが大事なポイントになると提案した。

1-3. 東大路高野団地の取組

東大路高野団地は京都市左京区にあり、紡績工場の跡地に団地が建設された。団地を中心として、その周りに商業施設も集まっており、周辺の戸建てに住む住民も集まってくる。緑豊かでまちの歴史を物語る煉瓦倉庫を集会所に活用し、住民全体のまちに対する意識は高い(図8)。この団地の隣接地に超大型のパチンコ店ができることになった。すると、住民が反対運動を起こし、その取組の中でまちづくりルールづくりの取組が開始された。

この地区からアドバイザーとして意見を求められ、赤煉瓦倉庫を盛り込んだまちの将来像づくりを提案した。後日、高野団地が発表した「ま



図8. 東大路高野団地 赤煉瓦倉庫⁷⁾



図9. 東大路高野団地 まちづくり憲章の制定の取組記事⁸⁾

ちづくり高野赤れんが憲章」が送られてきた。住民によるまちづくりの取組のよりどころができ、具体のルール案考える際の軸となる憲章で、これからの活動が期待される(図9)。

2. 男山のこちよいまちづくりに向けて

2-1. まちづくりの将来像の共有

まちづくりの活動を行う時に、まず、まちづくりの軸となる原点の共有を意識している。まちの良いところや問題点をみんなで共有し、確認し合った上で将来のビジョンを考えていく。そうすることでまちづくりの活動の方向性を揃えることができ、将来新たな課題が持ち上がっても立ち戻ることのできる原点があることで方向性がぶれることがない。これまで、まちづくりの軸となる原点を住民と一緒に考え、憲章としてまとめるまちづくりを様々な地域で実践してきた。

私自身、平成15年からの約3年間、男山団地でWS等を行い「男山地域活性化基本構想」の作成に関わった。男山地域で団地をどうするかではなく、男山地域全体をどうするか考えることが必要と認識している。そこで、様々な人が暮らす男山団地でも将来のビジョンを考え、まちに関する多様な人の価値観の共有を図るのがいいのではないかと考えている。

2-2. バランスのとれたまちづくり

まちは住宅や店舗、事務所など様々な用途が混じり合って形成されている。多くのまちの分析から、この用途が偏らず、バランスのとれていることがこちよいまちづくりの重要な要素である(図10)。男

山地域再生基本計画で掲げている将来像は「地域とともに、元気なくらいができる、住みたい、住み続けたい男山」であり、男山地域のバランスのとれたまちづくりが重要である。

3. 男山地域再生基本計画への提案

3-1. 基本計画での提案

男山地域の再生基本計画に対して、他地区からの取組からの提案を図10で示す。男山のまちづくりの将来像を共有するには、まず、まちの歴史をみんなで共有することから初めてほしいと考える。

大学の講師時代の10年あまりのゼミ活動を展開した地区ごとに「まち物語」の冊子を作成し、地域に紹介した。初期段階で住民が歴史などのまちづくりの基礎知識を共有しておくことで、みんなでまちについて熱く語りやすくなり、取組を見直す原点を伝えた(図12)。

これまで多様なまちづくりの現場で活動支援してきたが、以下で男山地域での活動に向けて参考になるような他地域での活動事例について紹介していく。

3-2. 他地区での取組から男山への提案

○向こう三軒両々隣り 安心安全数珠つなぎ(京都市南区上鳥羽学区)

子どもやお年寄りの見守り活動として、ご近所づきあいを見直し、日常的な、互いの声かけを復活することで、まちの安心安全の地域力向上を目的に「向こう三軒両々隣り」の

取組目的	取組名称	取組概要
見守り活動	向こう三軒両々隣り安心安全数珠つなぎ宣言	ご近所づきあいを見直し、日常的な、互いの声かけを復活することで、まちの安心安全の地域力の再生を目指す
	小さなおせっかい運動	日常の「小さなおせっかい」のさりげない取組を認め合い、安心して子どもを育て、育み、こちよく老後を通すことのできる、「小さなおせっかい」に包まれた、温かい、こちよいまちをみんなで目指す。
	おせっかいおじさん・おばさん運動	東京都荒川区の「あらかわの心」推進運動区民委員会が実施する「おせっかいおじさん・おばさん運動」
新旧住民交流	せいいつ住まい交流会	「私のまちに町内会があったよかったと思えるまちづくり」をめざして新住民を招待しての交流会の開催(隣人まつり)
まちの魅力発見・発信	通りの愛称募集	吹田市道路愛称づくり市民会議の取組 洛西ニュータウン内での通りの愛称募集に向けて取組中
	街路樹サポーター制度	住民と行政の協働による街路樹とその周辺部の美化や緑化の取組(京都市)

図10. 他地区で実施している取組から男山での取組への提案

取組を展開。そのつながりをマップにプロットして「安心安全数珠つながり」を作成した。(図1、2)。

○小さなおせっかい運動(上鳥羽学区)
東京都荒川区の「あらかわの心」推進運動区民委員会が実施する「おせっかいおじさん・おばさん運動」を学び、上鳥羽学区で、日常の「小さなおせっかい」を合言葉に、安心して子供を育て、育み、こちよく老後を過ごすことのできるための取組を展開した。「小さなおせっかい」に包まれた、温かい、こちよいまちをみんなで目指す運動である(図11)。

○せいいつ住まい交流会(成逸学区)
京都市上京区成逸学区では「私のまちに町内会があってよかったと思えるまちづくり」を目指して、旧住民と新住民を交流するイベントを定期的に開催している。出会った時に気持ち良く挨拶を交わせる近隣関係をつくり、人と人とのふれあいに生きる喜びを感じる。そんな未来ある姿に社会をデザインし直すためにも住まい交流会はとてよいきっかけとなる(図3)。

○道路愛称の取組事例の紹介
まちの魅力を発見・発信するために、吹田市道路愛称づくり市民会議の取組で「通り」の愛称を募集した。その結果、千里ニュータウンの通り名称が親しみのある名称に変わったとの事例を学び、香陵学区でもまちの多くの通りに愛称をつけることでまちの愛着を高めることを提案した。男山団地の多くの緑り豊かな通りが愛称で呼ばれることを期待する。

○京都市街路樹サポーター制度の紹介
京都市では住民と行政の協働による街路樹の見守りに向けた取組を展

開している。この制度でのサポーター登録した活動者は今まで(平成25年7月現在)、活動者は68団体、1285名になり、対象の高木は約4600本にもなるとのこと。多くのまちづくり活動で身近な街路樹を地域の人が見守る活動を提案している。

4. こちよいまちづくりに向けて

「こちよいまちづくりは、おいしい米づくり」であると考えている。おいしいお米とは、昔から受け継がれた水田で、土に根をはった稲と、水に漂いつながる浮草が豊かで、きれいな水に囲まれ、互いに助け合いながら、虫や動物がやすらぎ、おいしいお米ができる。これをまちづくりに置き換えて解釈すると、

- ・風習に固執する地縁型のつながりだけでは排他的なまちになる。
 - ・つながりを拒否するばかりでは、困った時に互いに支え合うまちはできない。
 - ・複数の稲と浮草と小動物の共生の中で本当においしいお米ができるように、
 - ・いろんな思いの人の思いやりとつながりによりこちよいまちができてあがる。
 - ・そのこちよさが新しい人をさらに惹きつけ、まちが元気になる。
- 以上のことからこちよいまちづくりとは何かについてまとめる。こちよいまちづくりとは、
- ・地域の歴史や伝統に培われたまちで、
 - ・ご近所づきあいが息づき、地域に根ざす住民と、まだ地域に根をはっていない新居住者が、
 - ・安心安全な環境をみんなで大切に守り、
 - ・互いがおもいやり、助け合いながら、

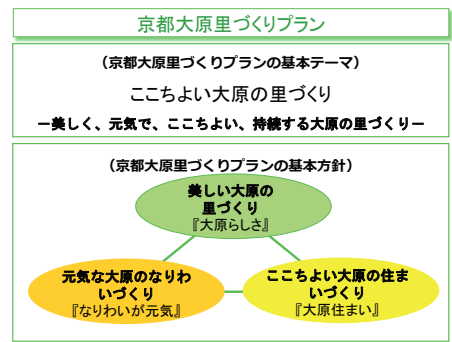


図11. バランスのとれたまちづくり

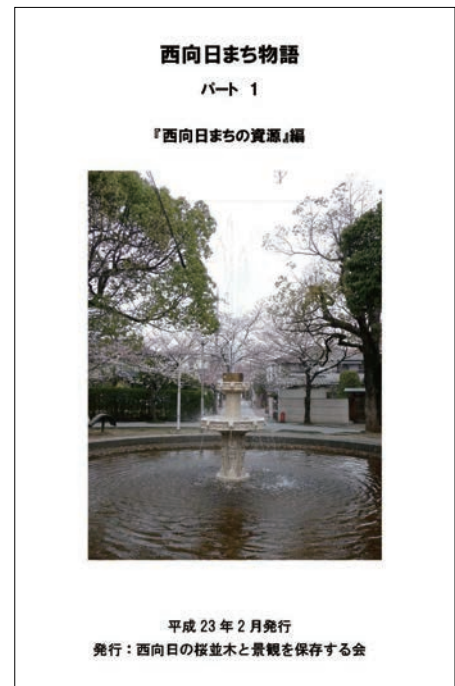


図12. まち物語事例(西向日地区)

- ・多くの人がまちを訪れまちを楽しむ、
- ・こちよいまちができる。
- ・こちよさが評判でまた人が集まる、一言でいうと、こちよいまちづくりとは「誰もがこちよいまち、ほっとできるまちづくり」であると考えている。

出典

- 1)3)4)5)7) 撮影:石本 幸良
- 2) 京都新聞:2008年9月13日朝刊
- 6)2013年7月 あすねっと香陵 安心安全部会作成
- 8) 京都新聞:2013年6月28日朝刊

『身の丈のまちづくりを目指して』

レクチャー:石本 幸良(京・まち・ねっと)
記録・作成:松浦 知子(関西大学大学院 博士前期課程)
宮崎 篤徳(関西大学 先端科学技術推進機構)

発行:2014年3月

(講演:2013年12月11日)

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅“団地”の再編(再生・更新)手法に関する技術開発研究(平成23年度~平成27年度)」によって作成された。

関西大学
先端科学技術推進機構 地域再生センター
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
先端科学技術推進機構 4F 団地再編プロジェクト室
Tel:06-6368-1111(内線:6720)
URL:http://ksdp.jimdo.com/